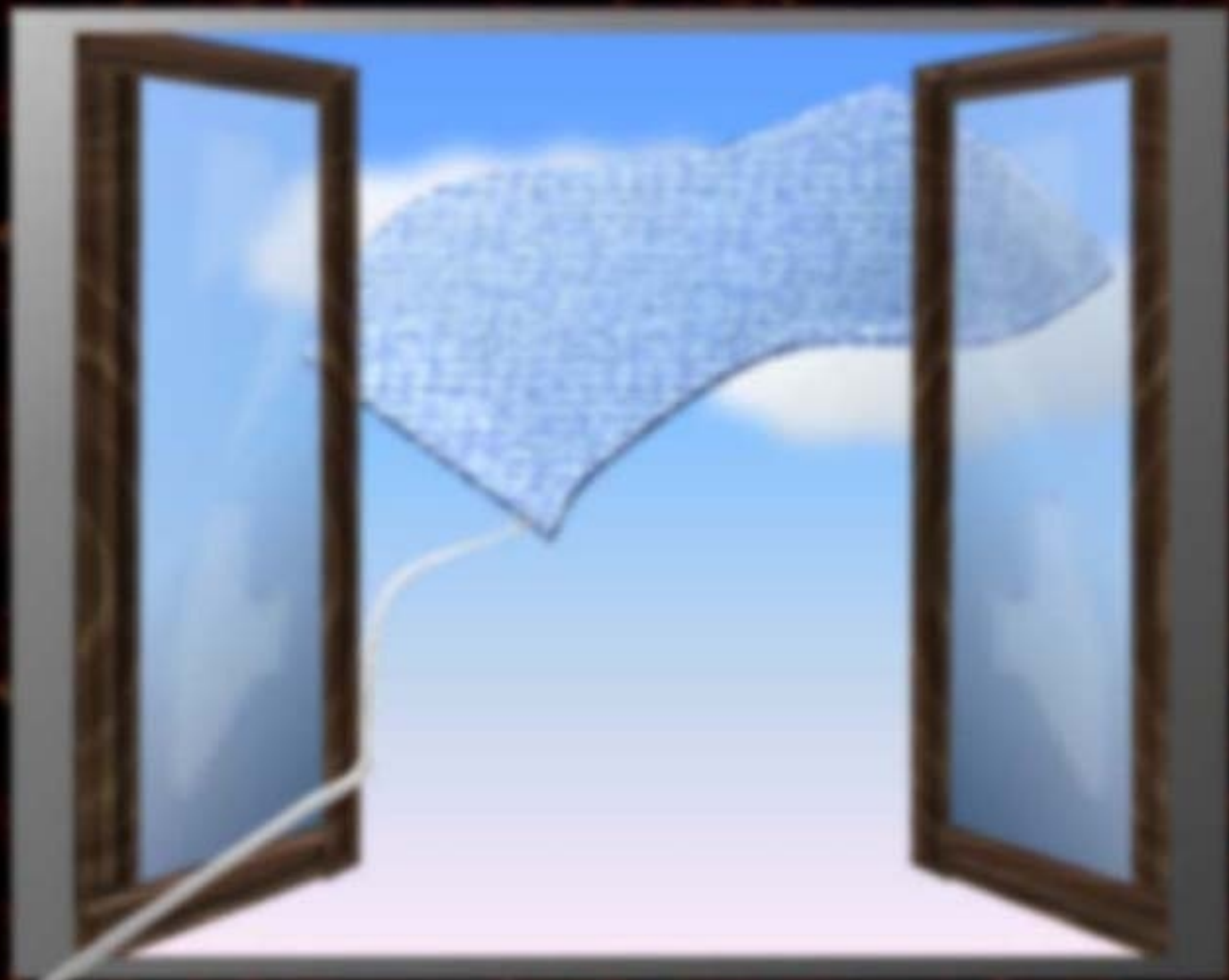


週刊

夢の窓

No.4



むうにい

うまいと評判のチャーハンを食べに行く

友人の桑田孝夫が言う。

「なあ、これからチャーハン食いに行かねえ？」

唐突だったので、思わず、「えっ？」と聞き返してしまった。

「だから、チャーハンだって。うまい店知ってるんだ」

わたし達は、その店へ行くことにした。

途中で桑田が自動販売機に寄る。

「喉が渇いちまってな」そう言うと、オレンジ・ジュースを2本買った。

当然、1本はおごりだと思うので、

「あっ、サンキュー」と言って、手を伸ばす。

ところが、

「はあっ？ 2本ともおれが飲むんだ」

冗談かと笑ったら、本当に2本とも飲み干してしまった。内心、面白くなかったが、喉が渇いていたわけではないので、何も言わなかった。

ところが、また自販機で2本買っている。

「よく、そんなに入るね。よほど喉がからからだったの？」半ばあきれながら聞いた。

「4本も飲めるわきゃないだろ。1本やるから、お前も飲めっ」

わけがわからない。

チャーハンの店へとやって来た。

「あった、あった。ほら、ここ。この店だ」よほどチャーハンが楽しみと見える。まるで、子供のようにはしゃぎっぷりだ。

外見からは、そんなに特別な感じはしない。どこにでもある大衆食堂、といったふうだ。

2人して店に入る。

テーブルが3つほどでいっぱい、たいして広くもない店内だ。そのテーブルも、だいぶ年季が入っている。

そのうちの1つに着くと、亀仙人のような老人が注文を取りに現れた。

「何にするね」亀仙人が尋ねる。

「チャーハン2つつ」桑田は迷うことなく、オーダーした。わたしも注文をしようとしたのだが、桑田の頼んだ「2つ」に、もしかしたら一緒に入っているのかもしれない。だとしたら、1つ余ってしまうことになる。

けれど、自分1人で2皿とも平らげるつもりかもしれない。さっきの缶ジュースの件もあるから、十分に考えられることだった。

逡巡しているうち、つい、注文を出し損ねてしまう。心の中はもんもんとしていた。

チャーハンが運ばれてくる。一応、桑田とわたしの目の前に置かれてはいる。果たして、これは食べ

てもいいのだろうか。

わたしが手を付けられずにいる間、桑田はぺろりとチャーハンを食べ終えていた。わたしのチャーハンに目をくると、

「あれ、なんだ。おまえ、チャーハン嫌いだった？」

やっぱり、自分の分だった！

「いや、大好きだよ」ほっとして、レンゲを手にとると、再び亀仙人がやって来て、すまなそうに頭を下げた。

「そろそろ、閉店なんでな。チャーハンは、わしが包んでやろう」

亀仙人は、新聞紙に直接チャーハンをあけ、不器用な手つきでくるみ始めた。新聞紙に油が染み出るわ、隙間という隙間から飯がはみ出すわ、こんな汚らしい包装を、今までに見たことがない。

まだ温かい包みを持たされ、わたし達は店を出た。

空きっ腹を抱えながら歩くわたしに、桑田はほがらかに話しかける。

「よかったなあ、チャーハンをテイク・アウトできて。なんてたって、あの店のチャーハンは門外不出なんだぜ」

ウレタンのピラミッド

道端にピラミッドが捨てられていた。胸くらいの高さだった。

「通り道にこんなもの捨てるなんて、近頃のエジプト人はマナーが悪いなあっ」

せめて邪魔にならない所まで寄せようと、ピラミッドを力いっぱい押した。小さいとはいえ、石の塊だ。気合いを入れなくては。

いざ押してみると、思いのほか軽かった。勢い余って、ずでんっとつんのめってしまう。

ピラミッドはウレタンで出来ていたのである。

「くう……エジプト人たら、ほんとにもうっ」

そのウレタン製のピラミッドを、ぎゅうぎゅうと丸めてやった。すると、ポケットにも入るくらいコンパクトになったので、持っていくことにした。

わたしは新宿御苑に向かう途中だった。桜も見頃かと、散策するつもりだったのだ。

中に入り、日本庭園辺りまで来たとき、

「そうだ、ここらの空いているところに、さっきのピラミッドを置いてみよう」と思い付いた。

ポケットから、てっぺんの三角の部分がのぞいている。そいつをつまんで、えいっと引っ張り出すと、ぽんっ、とピラミッドが飛び出した。

2度3度弾んだ後、桜の木の下に落ち着いた。数千年もの間そこにあっただかのように、とても馴染んで見える。

「悪くないぞ。花見客もこれには大満足に違いない」そう、わたしは確信するのだった。

ピラミッドにはファスナーが付いていて、下ろすと中へ入れるようになっていた。のぞくと空っぽで、まるで小さなテントのようだ。

「座禅を組むのに、ちょうどいいかもしれないな。下地もふかふかのウレタンだし、足が痛くなることもなさそうだね」

わたしは中に入り、ファスナーを閉じた。完全な闇となる。

座って足を組んでみた。さっそく、心が落ち着いてくる。あんまり暗いものだから、自分でも目を閉じているのか、開いているのかわからない。

ただ、ピラミッド・パワーの成せる技か、外の様子が手に取るようにわかる。桜の花びらの散る音さえ、1枚残らず耳に入ってくるのだ。

大木戸門の辺りから、見知った足音が近づいてくる。ああ、友人の桑田孝夫と志茂田ともるだな。あっちから入ってきたということは、丸ノ内線で来たのか。

2人は何も知らずにこちらへ向かってきた。

池のそばにピラミッドがあるのを見つけ、

「おい、みろよ志茂田。こんなところにピラミッドがあるぞっ」

「なんでしょうかねえ、春のイベントかもしれませんね」

わたしは内側からファスナーをそっと下げ、ぬっと顔を出した。

「やあ、2人ともっ」桑田と志茂田は、ギョツとして後ずさりをする。「中に入っていない？ 古代エジプトの神秘を体験させてあげる」

けれど、両者とも顔を見あわせて、遠慮がちに言うのだった。

「いや、今日はやめとくよ。ほら、あれだ。まだ、他の桜も見て回らなきゃならないしな」

「ええ、ええ、そうですとも。それに、わたしはピラミッド・アレルギーでして……」

桑田達は去っていった。本人達はひそひそ話しているつもりかもしれないが、わたしにはすっかり聞こえている。

「ピラミッドだぜ。小学生かっ、つうの。なあ、志茂田」

「危うく、われわれも巻き込まれるところでしたなあ。ふう、やれやれです」

普通のわたしなら、怒り狂ったかもしれないが、何しろピラミッド・パワーの力を宿しているのだ。自分でも驚くほど、冷静だった。

鳩のフンを頭の上に落とすだけで許してやろう。

のどかな散歩道

昼下がりに、特に行く先も決めずに歩く。穏やかな日差しが、狭い路地を暖かく照らしている。とにかく坂の多い所だった。どこか尾道を思い起こす軒並みである。

苔むした石段を下りていくと広場に出た。中心には、御影石を積み上げただけの古い井戸がある。井戸の周りで洗濯をする者、大きな榆の木の影で立ち話をする者、縁側に座って茶菓子をつまむ者、人が穏やかに集まっている。

大声で話す者がいないせいか、風が木の枝を揺らす音ばかりが聞こえてくる。磯の香りがするところをみると、ここはどうやら浜に近いようだ。

「布団を干すかねえ」と誰かが言う。

「うん、そうしようかい。なんたって、こんなにいい陽気だもんなあ」

4、5人の主婦や老婆が、布団を抱えて家から出てくる。そばの古いコンクリート塀は、すぐに布団でいっぱいになった。

布団は色も柄も様々だった。白地にピンクのバラが描かれていたり、鶴の飛びたつ様があしらわれていたり、まるで広場の一面にちょっとしたギャラリーが開かれたかのようだ。

どこからか茶色いトラ猫がやって来た。

狙いを定めて、たんっと塀の上に飛び乗る。猫にとっては造作もないことだった。

トラ猫は塀を歩いていき、今干したばかりの布団の上に、ぱふんっと伏せる。そのまま香箱を組んで、さも気持ちよさそうにあくびをした。

わたしは、（あーあ、あれじゃせっかく干したのに、毛だらけになっちゃうな）と思った。

それに、布団の持ち主がやって来て、あの猫を叱り飛ばすかもしれない。寝ている猫を起こすのは、どこか罪悪感があるものだ。

猫に気づいて、おばあさんが布団へ近づいてきた。

そら、きつとはたかれるぞっ。

おばあさんは、猫の背中をさすってやりながら、

「いい天気だなあ、あんたもいい気分かい？ そうだろうともなあ、ああ、そうだろうねえ」と話しかけるのだった。

なんだ、心配して損をした。この辺りの人たちは、誰も彼も親切で心優しい。それは昔からそうだった。そして、これからもずっとそうなのだ。

わたしはそのことをうっかりと忘れていた。

電卓に隠された機能

友人の桑田孝夫に電話を掛けようとするのだが、何度ボタンを押してもつながらない。
おかしい、壊れたかな。これだから、スマート・フォンは……そう思いながらよくよく見たら、テレビのリモコンだった。

「ははっ、これじゃ無理だよな」自分のおっちょこちょいには参る。

改めて探すと、机の上に見つけた。

けれど、やはり通じない。まさか、と確かめれば、今度は電卓だった。

一体、今日の自分は どうしてしまったのだろう。なんだか心配になってきた。

電卓の液晶には、桑田の携帯の番号が表示されている。

試しに「=」を押してみた。

[食い意地が張っていてマヌケ。]

と、答えが出た。桑田のことだとしたら、まさしく、その通りである。

もしかしたら、この電卓は、電話番号の主の情報がわかるのかもしれない。

試しに、アインシュタインの家の番号を打ってみる。

[$e=mc^2$.]

おお、やっぱりっ！

わたしは、片っ端から著名人の電話番号を入力してみた。

「彼の現在の資産は3兆7千万円」、「iPadは本当は円盤形になるはずだった」、「夫との関係は冷え切っていて、元彼とヨリを戻そうとしている」、などと、個人的なデータが次々と暴かれていく。

どうせなら、世の中の役に立つことが知りたい。

「プラズマは日常生活の全てを説明する……と信じている」、「フェルマーの大定理はこうだ。メモ帳と鉛筆、それにコーヒーを用意して読むように」、「ピラミッドは歪空間との通信機だったりする」。

今ひとつ微妙だ。だが、うまく使えば、きっと有益な情報を手に入れられるに違いない。

電卓をじっと見つめ、ある番号を打ってみた。ノストラダムスの携帯の番号だった。人類の未来がわかるかもしれない。

「＝」キーに指を掛けたその時、ピンポンとチャイムの音がした。

わたしは、電卓を置き、玄関へに行く。

ドアを開けると、いかにも怪しい黒づくめの連中が立っていた。

「なんですか？」

男の1人がバッジを見せ、

「AKBの者ですが、世界機密が漏れ出した可能性があって、調査しています」と言う。

内心、ドキッとした。さては、電卓のことがばれたのだろうか。

「さ、さあ、何のことだか……」わたしはとぼけることにした。

「そうですか。まあ、いいでしょう。もし、知る機会があったとしても、手を出さないことが賢明ですよ。好奇心は身を滅ぼします」

それが脅しだとすれば、わたしにとっては十分すぎた。もう、電卓には触れるまい。

AKB達はぞろぞろと引き返していった。1人が、思い出したように振り向く。

「特に、ノストラダムスについては要注意です」

言い知れぬ不安がわたしを襲う。

銭形警部に追われる

ここ最近、住みかにしている6畳一間のアパートを監視されている。相手は、あの銭形警部だった。そろそろこの場所ともおさらばかな。

実は、こういうこともあるかと、隣の壁に穴を開けておいたのだ。もちろん、そちらも自分で借りている部屋だった。但し、偽名であったが。

わたしはさっそく行動に移した。

隣の部屋へと移ると、あらかじめ用意しておいたガチャピンの着ぐるみに身を包む。

「ふふ、とつつあんめ、まさかガチャピンに変装しているとは気づくまい」

何食わぬ顔をして、その部屋から出ていくわたし。

しかし、さすがは銭形、一目で怪しい、と見抜いたようだ。

「むむ……」アパートの真ん前の電柱の影に潜んでいた銭形がうなった。人が実際に声に出して「むむむっ」というのを、生まれて初めて聞いた。「ばかもんっ、奴が犯人だ！ 追えーっ、追うんだっ！」

やばっ！ わたしは一目散に逃げだした。

狭い路地を走り、ビルの屋上を駆け上り、向かいのベランダへ飛び移ったり、駐めてあった自転車を拝借したりと、とにかく逃げ回った。

一方、銭形警部もとことん、しつこく追いかけてくる。時には、先回りをして待ち構えていることもあった。

お互い、付き合いが長いだけのことはある。わたしが銭形のことを知り尽くしているのと同様に、こちらの手の内も丸わかりのようだ。

「しつこい、とつつあんだよ、まったく」

特に、今回はいつも以上にくどい。普段なら、とっくにあきらめていてもいいのに、どこまでも食らいついてくる。

まあ、それも無理はない。

アパートを脱出する時に、「とんでもないもの」を盗んでいったのだから。

「逃がさんぞお〜っ」と怒声が迫ってくる。振り返ると、いつの間にか、すぐ後ろを銭形が追いかけてくる。さらに遅れて、総勢100名はいよいよかと思う彼の部下が土ぼこりを巻き上げていた。

わたしはなんだか、面倒になってきた。徐々にスピードを落とすと、はあはあ、と息を継ぎながら立ち止まる。

「わかった、わかった。もう、降参するよ。それにしても、とつつあんはタフだなあ」

銭形はわたしの隣に並び、腰を折ってぜえぜえとあえぐ。

「いや……わしも、歳だしな。けっこう、堪えておるのだ」

わたしはガチャピンから「脱皮」すると、中に隠していた荷物を差しだした。

「ほら、こいつは返すよ。正直、それほど欲しかったわけでもなかったんだ」

「まったく、お前はなんだってこんなものを……」銭形は荷物を受け取り、包装を解いた。

現れたのは、アパートに備えつけられてあったガス台だ。

「とんでもないものを盗んでいきやがって」

銭形のとつあんなは、再びぼやいた。

鍵の掛かった箱

手にマイクを持って、森の中をさまよっている。

「この道で本当に合ってるんですかぁ？」背後でカメラマンが心配そうな声を漏らした。

「さあ……」とわたし。そもそも、なぜこんな所を歩いているのかもわかっていない。

「そんな、無責任な。ディレクターから何も聞かなかったんですか。メモを預かっているとかは？」

「何も聞いてないよ。そっちこそ、打ち合わせとかなかったの？」

「ぼくはただ、『撮ってこい』と言われたから付いてきてるだけで、他は何も知らされてませんからね」

わたしはどうやら、実況中継に派遣されたりポーターらしい。でも、一体、何の実況なのだろう。

やがて、前方に視界が開けた。木と木の間からは、向こう岸が霞んで見えるほど広い湖が見える。

「どうやら、この辺りらしいね」わたしはほっとした。薄暗い森は、気持ちまでもが滅入らせてしまうらしい。

「ふう、どうなることかと思いましたよ」カメラマンは袖で額の汗を拭う。

その湖の中では、驚くべき光景が展開していた。

スカイツリーほどもあろうかと思えるドラゴンと、それに引けを取らない大きな人喰い鬼とが戦っているのだった。

「奴ら、湖から上がってきませんかねえ」カメラマンが不安そうに聞く。

「たぶん、来ないとは思うけど……」でも、身の安全が保証されているわけではない。「それより、ちゃんとカメラは回ってる？」

「回ってますって。さっきから、一瞬たりとも止めたことはないんです。一応、これでもプロですからねっ」

わたしは、実況を始めた。

「おおーっと、ドラゴンの強烈な巻き付きが入った！ これには人喰い鬼もたまらないっ。苦しそうに身をほどこうとあがくが、簡単には外れない！ あっ、今度は人喰い鬼のパンチが、ドラゴンの顎をまともにとらえたっ。これは痛いっ、さしものドラゴンも、これは効いているかっ！」

湖畔の岩場に、古ぼけた箱が置かれていることに、わたしは気づいた。海賊が宝箱を入れるのに使う、あのお馴染みの箱だ。

「ねえ、カメラマンさん。あの箱は何だろうね」

「へ？ どの箱ですか」カメラマンは、きょろきょろと見回す。

「ほら、あの岩の陰にあるでしょ？」

「あ、ああ。ほんとだ」そう言うと、駆けていった。「見てくださいよ、こいつ。まんま、ドラクエに出てくる宝箱じゃないっすか」

わたしもそばへと行ってみる。頑丈そうな木製の箱だ。長い間うち捨てられていたとみえ、表面はか

なり傷んでいる。

「開けてみようか」わたしは言った。

「ミミックとかだったらやばいですよ」カメラマンは後ずさりしながら、そんなことを口にする。

「ゲームのやりすぎだよ」わたしは一瞥をくれてやった。

一応、鍵は掛かっていたが、蹴飛ばしたら、あっけなく開いてしまった。

「開けるよ」とわたし。

「いいですよーっ」カメラマンは、いつの間にか森の入り口まで逃げていた。

箱を開けると、装飾の施された剣が現れた。手に取ってつかの部分を調べてみると、「ドラゴン・バスター Made in Japan」と刻印がしてある。

再び、湖の方を振り返ってみた。圧倒的にドラゴンが優勢だ。人喰い鬼が倒されるのも時間の問題である。

人喰い鬼に勝った後、ドラゴンは大人しく古巣に帰ってくれるだろうか。いや、その可能性は限りなく低い。ひとたび湖を出れば、人類にとって最大の脅威となることは間違いない。

では、どうする？

わたしは自分の役割を悟った。

マイクを捨て、剣に持ち換えると、木の陰で様子をうかがうカメラマンに向かって言った。

「カメラを回し続けるんだっ」

真夜中に雪野原で遊ぶ

ふと目を醒ます。

いつもの習慣で枕もとの目覚まし時計に手を伸ばすと、まだ夜中の2時だった。

それにしても窓の外が明るいな、とカーテンを引いてみてびっくり。

「わあ、いつの間に雪が！」

もうやんでいたけれど、どこまでが道だったか思い出せないほど、一面、雪野原だった。遠くの山からのぞく満月の光が、まるで昼間のように辺りを明るく照らしている。

わたしは居ても立ってもいられなくなり、隣の部屋で眠る2人の妹を叩き起こした。

「……もう。まだ夜じゃん、なんで起こすのさ」妹1がまぶたをこすりながら文句を言う。

「まだ夢中だしー」妹2は、まるで寝言のようにむにやむにやと答える。

「外を見てみ。その後で、寝るか起きるか考えればいいのさ」わたしは布団を引っぺがしながら、そう促した。

2人は面倒くさそうにベッドを降り、ガラス窓に顔を押しつける。

たちまち、息の合った歓声が上がった。

「雪だっ、雪があんなに積もってるよっ！」

「もう一眠りする？」わたしはおどけて聞いてみた。

「寝ないよー。寝るわけないじゃんっ」

「もっと、早く起こしてくれたらいいのに。ねーっお姉ちゃん」

わたしたちはパジャマのまま表に飛び出した。新雪は柔らかく、ぱすぱすと腰まで潜る。不思議なことに、少しも寒いとは感じない。きっと、夢中になり過ぎているせいだろう。

いきなり首の後ろに雪玉が飛んできた。続いてもう1発。

妹1、2の連続攻撃だった。今度はむちゃくちゃ冷たかった。

「やったなっ。よーし、見てなよっ」わたしは雪玉を転がして、ボーリングの玉くらいに育てる。「これでも喰らえっ！」

ところが、重すぎて、3メートルほどしか飛ばなかった。せっかく作ったボーリングの玉は、積もった雪の中へと沈んでいった。

「やーい、ぜんぜん届いてないよーだ。早く、喰らわせてみなってば」

いつの間に出来たのか、あちこちにカマクラが盛られていた。それも、かなり大きい。家代わりに住むことさえできそうだ。

「おーい、妹1と妹2。こっちにカマクラができてるぞーっ」

妹達は雪をかき分けながらやって来た。

「わおうっ、すっごい。誰が作ったんだろうね」と妹1。

「ねえねえ、このカマクラって、お店になってるよ。ここは八百屋、隣は魚屋だ」妹2は、カマクラを1つ1つのぞき込みながら報告する。「あ、むこうのはアパレルだ。わたし、ちょっと行ってみる」

「わたしもっ」妹1もついていった。

わたしは「本屋」に入ってみた。棚からレジまで、すべてが雪でできている。

「今月号の雑誌」のコーナーに、「ハロウィン」というマンガ雑誌が置いてあった。
「カボチャのマンガかな？」手に取って、パラパラとめくってみる。エッチな本だった……。

「なんか面白い本とかあった？」背後からいきなり声を掛けられた。妹1、2だ。

「あ、いや、別に、何もっ——」わたしは大慌てで、持っていた雑誌を後ろ手にラックへと戻す。
さっきうなじに投げつけられた雪が、今になって溶け出し、首筋を伝う。

背筋をいやあな感じの、冷たいものが滑り落ちていく。

週刊 夢の窓 No.4

<http://p.booklog.jp/book/85848>

著者 : mueny

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/mueny/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/85848>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/85848>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブックログ